

平成13年6月28日～14年3月12日議員定数等調査特別委員会 9月11日

●（鈴木和夫 君） 午前中の質疑を聞かせていただきまして、今大阪府そのものが大変危機的な財政状況になっている中で、唯一日本共産党さんだけが正しい主張を述べておられまして、日本共産党さんの意見をよく取り入れておれば、このような大阪府の財政事情にもならなかったのと違うかというようなお話があったかに受けとめました。

そこで、ちょっと一般論としてお尋ねしたいんですけど、日本の経済が平成三年にバブル崩壊以後十年近くなかなか立ち上がれない一つに、産業の空洞化ということが言われているんですけども、そのことについて、もしよろしければ御認識をお尋ねしたいと思います。

●（宮原威 君） その質問の趣旨がわからないんですけども、産業の空洞化がいいか悪いかという質問ですか。

●（鈴木和夫 君） 要するに、景気が立ち直れないのは産業の空洞化と言われているけれども、そう思われるかどうかという質問です。

●（宮原威 君） それは、一つの要素だとは思いますが、資本ですから、ある程度移動するということを通りから否定するというわけにはいかないと思いますが、しかしそこにはおのずから一定のルールが必要で、最近では、そういう資本の流動といいますか、産業の空洞化に対して少しルールがなさ過ぎるんじゃないかというふうに我々は思っております。

だから、ある程度一定のルールを同じ資本主義であってもつくるべきだと。ヨーロッパなどでは、例えば地域経済なんかに大きな影響を与えるような場合に、企業の移動などについてもアセスメント制度などをつくっているところがございますが、そういうことも含めて考えるべきだというふうに思っております。

●（鈴木和夫 君） ずっと共産党さんの御主張が正しいという認識のもとでどういうお考えかということで、産業の空洞化というのは、やはり日本の人件費、生産コストが高いがゆえにアジア諸国の人件費の安いところへ全部流れていったからこそ、日本の経済の空洞化があるということですから。

私は、午前中の共産党の御意見を聞いていまして、人件費は別やという御発想をしておられる中で、この大阪府を再建する意味でも、大阪府がなかなか立ち直れないのは、やはりその人件費の問題だと思うんです。そういった人件費をいかにおろすかというのが、今どこの業界、団体においてもそういう形のことが一番主力なんですけれども、そういった中で逆行するような百二十名に定数をふやすについては、今の時代背景とは全く違う考え方じゃないかというふうに思うんですけども、そこでどう考えるのか、お尋ねしたいと思います。

●（奥野勝美 君） 私たちは、地方自治体は普通の一般の企業と当然違うわけで、住民のサービス機関であるというふうに考えています。だから、それを経営的な感覚で、人件費が高いからそれを即削減というふうなことは、少し我々の考え方とは違うんじゃないかと。

これも何遍も申し上げて恐縮ですけども、これまで進めてきた特に大型公共事業などを見直して、そして財政再建の方向を見つけ出していくと。しかし、それでもなお無理であれば、職員にもよく理解をしてもらって人件費を削っていく、あるいは減らしていく。もちろん議員の数にしても、あるいは費用にしても考えるべきだというふうには思います。

●（鈴木和夫 君） 公共事業を先にやってから、それがでけへんから人件費を減らすというのは、僕は、こういう危機的な状況のもとではやっぱり両方やらないかんと思うんですよね。そういうふうな時間的なロスとなりますと、ちょっと具体的話として、今回八名ふやしますと、公明党のときの答弁で、直接人件費と事務局経費で大体一人当たり年間に三千六百万かかっているということで、これで八人にしますと約二億九千万弱になるんですが、この辺の財源は、どういうふうな考えで考えておられますか。

●（奥野勝美 君） 私たちも、八名ふやすと、直接議員の歳費に当たるお金というのは二億一千六百万円必要だというふうに思っています。そして、午前の答弁のときに申し上げましたけれども、もとの八十二万円、現在九十三万円ですけれども、一九九二年にこれが十一万円引き上げられた。もとに戻せば、これが十一万円掛ける百十二名、さらに当然これは年末等の期末手当にも反映してまいりますから、毎月の歳費とプラス年末等の期末手当を入れましたら、十七・五九カ月になると思います。それで二億一千六百七十万円が削減されるので、ちょうど当てはまるのではないかというふうに財政的には考えております。

●（鈴木和夫 君） 一九九二年に共産党さんだけが反対をなさって、その十一万円を上げたということで、僕は、ちょっとそこに矛盾点があると思うんです。枚方市議会もそうやったんですけれども、歳費の値上げのときには、必ず日本共産党さん、どこの議会でも反対なさいます。九二年においても、この大阪府議会で共産党だけが歳費の値上げを反対されたんですけれども、普通そこまでおっしゃるのであれば、僕らは単細胞ですから単純に考えて、反対しているものであれば、その十一万円についてはもらわないというのが私は鉄則やないかと思うんです。反対を主張しながらその分いただけるという、当然その背景には、共産党だけ反対しても、この法案は通るということが前提であって、そういうふうな見方もあるかもしれません。そういうふうな考え方がありまして、おっしゃっていることと現実とは若干違うのと違うかと。

ですから、今九二年のお話をなさいましたけれども、やはりそういった形で、今回の定数条例改正の件につきましても、共産党だけが定数増である、ほかの会派につきましても全部定数減であるという中で、私たち多くの会派とのギャップについてどういうふうに考えておられるのか、お尋ねしたいと思います。

●（宮原威 君） その質問の前に、少し御意見について共産党の考えを申し上げておきたいと思います。

我々は、歳費については、もちろん程度によりますが、値上げに反対したから受け取らないという態度はとりません。同時に、しかし政党助成金などのようにいわゆる政党活動に対する援助というようなものについては、税金でやるべきではないというふうに思っていますから、そこはおのずから性格が違う。だから、政党助成金なんかの場合は、反対もし受け取らないという態度をとって、片方は、反対をするけれども、受け取るというふうに使っているというか、それはそういうことです。

それから、ほかの各会派の方と意見が違うというのは、それはそれで仕方のないことで、問題は、提案の中身についていろいろ御議論をすれば済むことなんじゃないかというふうに思っています。

ただ、先ほど全体が人件費が高いから云々かんかんという話でしたが、私どもは、午前中も若干そういう御意見がございましたが、日本の場合は、今確かに一企業のことを考えればリストラは必要でしょう。しかし、社会全体で見れば、それは逆のマイナスの効果しかもたらしていないというふうに思っておりまして、雇用の点でも、製造業の技術などを引き継ぐというような点でも、あるいは環境や安全、福祉、教育いろんな点から考えても、社会全体のリストラというのはむしろ逆効果をもたらしっていると、そこが今大きな政治問題になっているんだというふうに我々は思っております。

●（鈴木和夫 君） 反対したけれども多数決で通った、通ったから、その多数決の原理に従って歳費をもらっているんだというふうな御答弁と私は理解したんです。それならば、今回の定数削減でいろんな意見がありますが、最終削減という形が通れば、共産党さんとしてはそれに従うのかどうか、お尋ねしたいと思います。

●（奥野勝美 君） それは議会制民主主義ですから、あくまでも議論をよく尽くして、できるだけ全会一致ですべきだというふうに思いますけれども、しかし事この特別委員会が設置されて、そういう法に基づいてやられている限り、多数決で決まれば我々も当然それに従うと、こういうことになります。

●（鈴木和夫 君） それで、午前中の最後に宮原委員が、北川委員の質問の中で、合区は賛成やけれども、削減については反対やという答弁をなさったんです。覚えておられます、先ほどの最後に。

●（宮原威 君） 削減というのは、総定数の削減。

●（鈴木和夫 君） そうしますと、合区は賛成するけれども、削減は反対やと。僕どうも理解ができませんので、もしよろしければ、そのことについての真意をお尋ねしたいと思います。

●（宮原威 君） 真意と、そんな難しいことじゃなくて、総定数の削減には賛成できないということと任意合区をやるということとは、全く別の問題で矛盾しないと思います。

●（鈴木和夫 君） 定数削減というのが、多くの会派の意見なんです、数は別にしまして。そういった中で、合区という問題が一つは懸案としてあるわけですから、削減という中に合区というのは切り離せないものなんです。

●（宮原威 君） それは全く別の問題ですよ。削減でなかったら合区を言うたらあかんと、そんな話はどこにもないと思います。

●（鈴木和夫 君） 例えば、合区しますと、合区をただで定数をふやせるというのが共産党の意見なんです。合区も入っていますよね。ほかの多くの会派は、多数決からいえば、削減という流れはもう既成事実のような形になってきてるわけです、どない見ましても。削減については、多数決でそうなれば従うという話の中で、合区は構へんけれども削減は困るというのが、宮原委員の午前中の答弁なんですよ。

●（宮原威 君） そうです。

●（鈴木和夫 君） そのことについて、私は、あくまでも削減と合区というのはある程度一体化したものだと思っているんです。

●（奥野勝美 君） ちょっとそれは違うんじゃないかというふうに思います。我々は、ずっと申し上げておりますように、ふやすべきだというふうに主張しております。ほかの党の皆さん方は、削減するという話です。それはそれで議論を詰めていっていただきますけれども、その問題とは別に合区の問題というはあるというふうに思いますから、鈴木先生がおっしゃっている分には、我々おっしゃっている意図がよく理解できませんから、我々の考え方は、宮原議員も言いましたように、私も申し上げましたそういうことです。